

特集

令和6年 能登半島地震 の現場から

2024年の年明けは、元日に最大震度7の大地震が発生するという、衝撃的なものでした。令和6年能登半島地震。いまだ復興の道半ば、それどころか、9月には追い打ちをかけるように同地域で豪雨災害も発生するという大変な状況ではありますが、救急医学・災害医療に関する2024年の象徴的な出来事であり避けることのできないテーマとして、本年最後の『救急医学』ではこの地震を中心に特集いたします。

能登半島地震については、当然ながら種々のメディア、あるいは学術集会等でも取り上げられ、議論がなされてきていますが、今号の特集では「令和6年能登半島地震の現場から」と題し、多様な立場で被災地の医療・救護・ケアに携わった当事者の経験や声を集め、そこからさらに災害医療の現状・課題を考察していくことを目指しました。

具体的に、前半の「能登半島地震、そのとき起こっていたこと」では、現場での実際の事例を通じて、災害医療に関する活動を振り返ります。能登半島地震では激震により多くの建物が倒壊し、多数の負傷者が発生しましたが、これに対して多くの医療支援チームが現場に駆けつけ、被災者の救護・救命にあたりました。まさにその当事者の先生方から、現場で起こっていたことをご報告いただきます。また、支援側のみならず、被災された地域医療施設の先生方の経験も紹介することで、より鮮明に当時の現場を振り返ります。

後半は「能登半島地震を経て、考える」です。日本の災害医療体制は、阪神・淡路大震災以降、多くの災害を経験して進化してきました。そこで、今回の能登半島地震を通じてみえてきた災害医療の現状・課題・展望を掘り下げて、より俯瞰的な目線から災害医療の未来について考えていきます。

もしかすると、まだこの震災を「振り返る」には早すぎるかもしれません。しかし、だからこそ、第三者的に冷静に振り返るのではなく、現場からのリアルな報告を原稿としていただきました。本誌読者の皆様がそれぞれの立場・環境で、この災害の支援・復興、そして未来に起こり得る災害への対応について、感じ、考え、動く。本特集が、その一つのきっかけとなれば幸いです。

特集企画ゲストエディター
NPO 法人ピースウィンズ・ジャパン
稲葉 基高